

土台

松蔭中学校・高等学校聖書科教員
日本キリスト教団洛西教会担任教師
梅田 玲奈

「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。
雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。
(マタイによる福音書 7 章 24-25 節)

ただいま司会の方によってご紹介にあずかりました。梅田玲奈と申します。私は 2021 年度に、同志社大学神学研究科を修了し、いくつかのキリスト教学校での勤務を経て、今年から神戸市にありますが松蔭中学校・松蔭高等学校という学校で聖書科の教員としての働きが与えられております。また、教会での働きとしては、京都市内にあります日本基督教団洛西教会の副牧師を務めております。月曜から土曜まで、神戸の松蔭中学校高等学校に勤務しておりますので、現在の私の住まいは神戸市にあります。ですので、毎週日曜日は阪急電車に一時間半ほど乗車し、神戸から大阪を経由して、京都の洛西教会に通っています。正直なところ遠い、あまりに遠すぎるのですが、洛西教会は私が同志社大学神学部に通い、洗礼を受けた教会でもあります。現在、私は副牧師という立場ではありますが、よく知っている洛西教会でぬくぬくとした、教会生活を送らせていただいています。

私は 5 年前まで、神学部に通学していました。神学部の学生なのだから、教会に通っているのは当たり前でしょと思われる方もいらっしゃるかもしれません。ですが、神学部の内実はそうではなく、教会に通っていない神学部生もいたことを記憶しています。私自身、中学高校とキリスト教主義の学校に通っていました。ですが、正直に言うと熱心に聖書の授業に取り組んでいたタイプではありませんでした。同志社大学神学部に入ったのも、「京都という町にあこがれて」が一番の理由です。まさか自分が教会に通うことになるなんて、そしてなんとまさか聖書の先生をやっているなんて、高校時代の私が聞いたら驚くことばかりだと思います。神学部に入學すると、教会に行ってレポートを書くという課題が出されました。京都の教会、大学生の多い街京都に立つ教会は、集った人たちでごはんを一緒に食べることを大切にしていることがあります。大学に入學し、一人暮らしを始め、一人でごはんを準備して食べるということに寂しさを感じていた私は、教会に行けば誰かと一緒に食卓を囲むことができるということに気付かされたのです。ある意味で、不純な動機、ごはん目的で私は教会に通い始めたのでした。とは言え、ごはんを一緒に食べる。共に食卓を囲むという行為は、イエスさまご自身がとても大切にされたことでした。当時のユダヤ教社会の中で、差別され存在しないものとして扱われ、寂しい思いをしている人たちにイエスさまは声をかけ、食卓に招きました。大学時代の私は、まさに寂しい思いをしていた一人であって、イエスさまの食卓に招かれたのだと今では思っています。

大学一年生から教会に通い始め、大学生活の方ではキリスト教文化センター（以下、「キリ文」という）の学生スタッフも始めました。キリ文の学生スタッフを始めたきっかけは友人の誘いで、彼女の誘い文句はこうです。「おやつ食べれんで」教会ではごはんを、キリ文ではおやつを。どれだけ食い意地がはっているんだという感じではありますが、食べ物に導かれて、いえ、神様に導かれて、教会に通い、そしてキリ文の学生スタッフをしながら、学生生活を送りました。キリ文の学生スタッフとして、チャペルアワーの司会をさせてもらう機会が何度ありました。チャペルアワーの後には、メッセージを担当された方を囲んでお茶を飲むこともありました。メッセージを担当される方は、教会で働かれています牧師さんや司祭さんだけでなく、キリスト教学校で働く先生、その他にも様々なフィールドで働きを担っている方との出会いが与えられました。この様々な方々との出会いを通して、私は聖書科の教員として、また牧師として立てられているということ、同志社大学に足を踏み入れた今、改めて感じさせてられています。同志社大学での学生生活、キリ文学生スタッフとしての経験は、今の私の土台の一つになっています。

さて、先ほど司会者によってお読みいただきましたのは、マタイによる福音書 7 章 24 節～25 節「家と土台」という小見出しがつけられた箇所です。この箇所は、新約聖書 6 ページ、マタイによる福音書 5 章に始まる「山上の説教」のしめくくりとなっています。山上の説教とは、イエスさまが小高い丘のような場所に立ち、群衆や弟子たちに様々な教を説いたというエピソードとして、マタイ福音書に記されています。マタイによる福音書 7 章 24 節にはこうあります。「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。」これらの言葉とは、山上での説教すなわちイエスさまの教のことです。イエスさまの教を聞き、そして行う人。つまりイエスさまに従う人は、岩の上に家を建てる賢い人だとイエスさまは仰っているのです。この言葉を聞き、「うんうん。イエスさまに従うことって大切だね」と思う方がおられる一方で、「自分はキリスト教を信じていないから賢い人じゃないのかあ」と思われた方もいるのではないのでしょうか。聖書の言葉を聞き、そして受け取り、自分がどう感じるか、どういう思いに立たされるかは、私たち自身に全く委ねられています。ですが、今日は「土台」に着目して、共に聖書の御言葉を味わいたいと思います。今もそして昔も、家を建てる時、家の基礎となる土台部分はさらさらとした砂の上ではなく、がっちりとした強い地面を必要とします。現代のお家づくりには、基礎工事と呼ばれる土台作りのための工事を行うようです。つまり、お家を建てる時に最も重要と言って過言ではないのが、土台づくりであるということです。ですが、私たちが自分のお家を選ぶ時や、お友達のお家を訪問する時、家の土台に目を向けることがあるでしょうか。「この家の土台が好きだ」もしくは「あなたの家の土台、とっても素敵だね」そう言われること、口にすることがあるでしょうか。恐らく土台ではなく、「あのお家素敵だね」「良いお家に住んでるね」という、家自体に言及することが多いかと思います。私たちは土台ではなく、すでに建っている立派で豪華な”家そのもの”に目を奪われるのです。このことは、家の話だけではなく、私たちの生きる社会にも通じる場所があるのではないのでしょうか。私たちは目に見えて分かりやすい社会的立場や社会的な成功ばかりに心を向けてしまう時があるからです。私たちはよい成績をおさめること、よい学校に入ること、よい会社に入り、そして立派な家を建てること、そのことばかりに心を奪われてしまうのです。しかし、イエスさまは「土台」こそが大切であるということを私たち

に教えてくださっています。立派で豪華な家そのものではなく、家の土台こそが重要であり、家がどのような場所に建っているかということに心を注ぐことの大切さを説いておられるのです。私たちの歩む人生には、まさに雨が降るような困難な時や、川があふれてしまってもうどうしようもない時、風が吹いて立っていることさえ苦しい時があります。自分ではどうにもならない。なすすべがない。そのような苦しく辛い中をどう歩いていくのか。やっぱりイエスさまは、私たちが神様を土台とすることを望んでおられるのだと思います。旧約聖書の詩編 127 編 1 節にはこのような歌が記されています。「主御自身が建ててくださるのでなければ／家を建てる人の労苦はむなしい。」私たちはいつしか、自分で立っている。私の土台は私自身が造り上げたのだというような、高慢な思いを抱くことがあります。しかし、聖書的な視点で見れば私たちは一人で立っているのではなく、神によって”立たされている”と言えるわけです。人生の中で雨が降る時、川があふれる時、風が吹く時、どうしようもない困難や苦しみ、私たちは一人でさらさらの砂の上に立っているのではなく、神様そしてイエスさまが岩となり、共に立っていてくださる。そう思うと、寂しさや虚しさは少し軽くなるのではないのでしょうか。イエスさまは私たちに、土台に目を向ける生き方へと招いておられます。時に、素直に招きに応えることが出来ない私たち。立派な家に心奪われてしまう私たち。それでもなお、イエスさまは絶えず招きの手を差し伸べ、土台に目を向ける生き方を教えてくださるのだと私は信じたいと思います。そのことを信じて、安心してこれからの人生を歩いていく者でありたいと思います。

共に祈りの時を持ちましょう。

私たちに命を与えてくださる神様

今日こうして御前に集い、チャペルアワーの時を過ごすことが出来ていることに感謝いたします。私たちはすぐにあなたのことを忘れ、立派な家を建てたいと願ってしまう性質があります。そんな私たちに改めて、土台を大切にする謙虚な心を与えてください。

日本各地域、世界各国には安心して日々を送ることができない方々がいることを覚えます。あなたの平和が一刻も早く実現するよう、私たちを用いてください。

この祈り、ここにおられるお一人おひとりの祈りと合わせ、私たちの友なる主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン